

善隣

No.498 通巻765

2018年（平成30年）12月1日発行（毎月1日発行）

2018 12



一般社団法人 国際善隣協会



関西地区懇談会（2018年10月16日）
（左より 田中忠仁、四塚勝、福澤紀久夫、藤沼弘一、矢野一彌、近藤均、佐野吉秀、吉村良夫、敬称略）



石原健一最高顧問（神戸在住）を訪問（2018年10月15日）
（左より 佐野理事、藤沼事務局長、石原最高顧問、矢野会長）

善 隣 目 次 2018年12月号

公開講演会記録

アジア太平洋情勢と日本の役割	小川郷太郎	2
祖父 大平正芳と中国 一現在、過去 そして未来へ.....	渡邊満子	10
日本の伝統話芸 講談の世界	宝井琴柑	18
「宝鋼」第一期工事完成式典の思い出	杉本 孝	23
中国ウォッチング	編・訳 上松玲子	28
コラム 〈腰折れ文〉十六、.....	渡邊澄子	30
陶々俳壇	馬場由紀子選／戸部 守	31
協会通信・同好会だより		32
2018年12月の行事予定		33

みんなの写真館

善 隣 第498号 通巻765号

2018（平成30）年12月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051

FAX 03（3573）1783

発行人 矢野一彌

印刷所 旬ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

公開講演会記録

アジア太平洋情勢と日本の役割

元外交官 小川郷太郎



私は、約40年間の外務省勤務で8回の海外勤務を経験したが、高校時代のアメリカ留学を含めると合計24年間を7つの異なる国で過ごしたことになる。海外生活には興味深いことや発見が多いが、その経験をもとに「アジア太平洋情勢と日本の役割」というテーマで私が感じていることをお話ししたい。まず、これまでの人生で感じたことから始めたい。

1 世界行脚で感じたこと

(1) 高校3年の時、アメリカに1年間留学した。1961年から62年なので日本の高度成長が始まる前である。まだ戦後を引きずっていたような段階の日本からアメリカに行くと、素晴らしく綺麗で

豪華なバスや大きな乗用車が凄いスピードで走り交う整備されたハイウェイなどに眼を見張り、お世話になるホストファミリーの家で初めてみた巨大な冷蔵庫や1か月分ぐらいの肉などの食料品が詰め込まれている大型冷凍庫などに驚嘆した。毎日受験を目指して過ごしていた日本の高校生にとって、アメリカの学校の開放感、自由な男女交際、健全な社会人を育てるような教育方針などに仰天した。日本にはない「スピーチ」という科目の授業を選んで人前で面白く話す方法を学んだり、生まれて初めてデートしたり、卒業時の大ダンスパーティーに参加したり、アメリカでの慣れない初体験はその後の人生に大いに役に立った。



初めてのデート
(卒業時の大ダンスパーティ)

そして、ある日、アメリカの家族との夕食で私が取り上げた原爆の話は激しい論争に発展し、その時の経験が私の将来に決定的な影響を与えることになった。アメリカでの生活に少し慣れて、家族との食事の時の話題も当たり前のことから何か新しいものをもとって、私が日本の高校の旅行で訪ねた広島原爆資料館で

見た展示の強烈な印象をもとに原爆という兵器の非人道性に触れて見た。私の話が始まるやいなや、アメリカのお母さんが、顔を真っ赤に興奮させて大声を出した。「ゴウタロウ、何をいうの!」。その勢いに押されてお母さんを見ると、燃えるような目で私を睨んでいる。「あの戦争を始めたのは

卑怯な手段でパールハーバーを奇襲した日本でしょう! 原爆は長く続いた戦争の犠牲者がさらに増えるのを防ぐために投下されたのよ!」と、興奮冷めやらない勢いである。お父さん、二人の姉と高校同級の弟も次に私が何を言うのかを凝視し見守っている。私はややたじろいで、「お母さん、パールハーバー攻撃



アメリカの高校での「スピーチ」の授業（1961～62年）

のことはもちろん知っているけど、僕は兵器としての原爆の殺傷力の凄さや非人道性を言いたかったんです」と言葉を絞り出した。真珠湾攻撃や原爆についてのアメリカ人の感情や認識は知っていたのでさほど驚きはしなかったが、もともと元気の良かったお母さんの激しい感情の露出は予想を超えたもので、私の脳裏に深く刻まれた。思うに、私は無意識のうちに原爆の被害者としての日本人の立場から話したのだろうが、真珠湾攻撃の被害者という意識のアメリカ人が他方にいるのだ。その日の出来事は、同じ事象について

これほど双方の立場が違うという事実気づかせてくれることになった。それがきっかけで、その後戦争について少し勉強をした。戦争のことをより知るにつれて、どの戦争でも指導者や兵士に至るまで狂気のような状況になって非人道的、非倫理的な行為に陥り、何十万、何百万の無辜の市民が犠牲になることが避けられないことがわかってくる。だから、戦争は何としても避けなければならない。戦争

回避のためには国と国が交渉することが重要だと思ふようになって、私は将来の仕事として外交官になることを目指すようになった。戦争は絶対避けなければならないとの意識は、外務省勤務中ずっと持ち続けて行動した。

(2) 外務省では日本と海外の勤務を繰り返して行ったり来たりするが、私はフランス(2回)、フィリピン、旧ソ連、韓国、ホルル、カンボジア、デンマークの7つの国や地域に在住した。それぞれの国で多くの日本との違いに出会ったが、「違い」はとても面白く、学びやインスピレーションの源泉である。2、3の例を挙げれば、旧ソ連末期の経済社会体制の驚くばかりの非効率性や不合理さを目の当たりにして市場原理の重要性を実感した。人々を監視し盗聴や検閲をする人間不信の統治行為は、外国人である私の日常生活でも随所に露見した。こうした社会に対する国民や知識層の怒りは激しいものがあるがその怒りは権力で抑え込まれるのを見て、民主主義の価値を知った。カンボジアでは貧困の凄まじさに胸を打たれたが、ODAの重要性和カンボジアに対する最大援助国である日本のアプローチの優れた点に密かな確信

と誇りを感じた。デンマークでは簡素で透明な社会システムと人間の生き方から多くのインスピレーションを得た。中でも、男女協働による家事や育児の営み、定時退社が当たり前の家庭中心の生活、日本では信じられないほどの高い税金を払いながら享受する豊かな生活などから、日本社会のあり方について多くの示唆を得た。

(3) いろいろな国を回ってみると、世界には無知、誤解、偏見が満ちていて、これらがしばしば国家や民族間の憎悪や紛争を助長させていることを知る。対立している一方の国は、相手の国や国民を激しく非難し敵視するが、その相手の国に行ってみると非難や敵視の理由は無知や偏見・誤解に基づいていると感じることが多い。会ってみると人間はどこも同じだということがわかる。被害を受けた国民の悲しみと苦しみは人間の当然の気持ちである。敵視し合うイスラエルとパレスチナの人たちがもし直接出会って話せば、相手も同じ普通の人間だということも理解できるはずだ。だから、抗争をする国同士の政府や国民は相手の立場に身を置いて考えることが重要だ。私は第二次大戦時に日本軍が全土を占領した

フィリピンでの勤務で各地を回ってみると、戦争中に日本軍と戦って亡くなった家族や友人の話をよく聞いた。当時の思い出や感情が明るく振る舞うフィリピンの心にまだ残っていることを感じた。韓国では、日本の植民地統治時代の「皇民化政策」が誇り高い韓国（朝鮮）の人々の心を傷つけ、特に創氏改名は家系を大事にする朝鮮の人々に奥深い恨みの念を残したが、そのことについて日本人が十分認識していないことが、未だに続く日韓間の感情的軋轢の背景にあることもわかった。国際関係でも相手の立場に身を置いて考えることが重要な所以である。

他方、世界を回ると、どこにもいい人たちがいて、素晴らしい文化があることを発見する。会って人間として話せば、すぐ仲良くなれる。高齢になると「終の棲み家」をどこに定めようかと考える人も多いが、私にとって終の棲み家は世界であると感じて、今でも世界を飛び回っている。

(4) 世界を行脚していると日本を振り返ることが多い。その結果私が思うの

は、日本は世界に稀な文化大国だということだ。世界中の人々が日本の文化に関心を持ち、それを通じて日本人に親近感を覚える。遠いアフリカや中東でも、近くてしばしば反日行動が繰り返される韓国や中国でも、日本の文化に関心と愛着を持つ人々が大多数である。その背景には、日本には世界の人々を惹きつける極めて多様な文化のジャンルがある。歌舞伎や能などの古典芸能、絵巻や浮世絵などの美術（北斎はフランスの印象派の巨匠たちも惹きつけて19世紀後半にフランスやヨーロッパに「ジャポニスム」を起こした）、文学（俳句や近現代の文学も多数の国々で人気が高い）、柔道（世界に



ストックホルムでの「北斎展」のポスター

にくまなく浸透)、和食などの食文化、若者文化（マンガ、アニメ、コスプレ）等々、どれも真に世界中で人気がある。



カンボジアでの柔道のデモンストレーションや稽古の様子（2003年）

加えて、日本人が持つ誠実さ、責任感、秩序意識や冷静さなどの資質がある。東日本大震災の時の罹災者の秩序ある冷静な態度は世界中に報道されて賞賛された。日本人はあまり気付いていないが、これらの日本の文化力はアメリカや中国も真似のできない強力なソフトパワーであり、日本ブランドでもある。

2 世界は大変化と混迷の時代に ——アジア太平洋情勢の展望

ここで目を転じてアジア太平洋を中心に世界情勢を見てみよう。アジア太平洋には大きな変化が起きているが、混迷を加速する要素と将来に向けて期待の持てる肯定的要素がある。

(1) 超大国であり続けたアメリカが最近世界のリーダーから攪乱者になりつつある。トランプ大統領になってそれが顕著だが、実はオバマ大統領の時代からその兆候が見られた。ブッシュ（息子）大統領時代のイラク戦争などの経験をもとに、オバマ大統領は「アメリカはもはや世界の警察官ではない」と言って中東でのアメリカの軍事プレゼン

を一方的に宣言し、そこに軍事的施設を構築して着々と海洋での支配力を強化している。アメリカの退潮を狙って国際的影響力を高めようとするロシアや中国などを「新帝国主義国家」と呼ぶ論者も出て来た。クリミヤ半島併合や根拠なく南シナ海などを囲い込むことは国際法違反であるが、この両国は「法の支配」を主張する日本や世界の声を無視して行動している。トランプ大統領も国際ルールを意に介しない行動をとるので、今や「法の支配」という国際社会の重要な原則が危機に瀕している状態である。何年か先、トランプ大統領が交代した後もアメリカがどうなるかは不透明である。

スを徐々に減らす政策をとった。アジアでの軍事プレゼンスもやや上下はしたが低下傾向になった。超大国が隙を見せると他の国や勢力がすかさずその隙間に入り込んでくるのが世界の現実である。アメリカの軍事プレゼンス低下に伴い、中東地域が不安定化した。シリアの内戦が継続し混乱が深まるとアサド政権を支援するロシアが軍事介入を強め、イスラム過激派武装集団のISなども勢力拡大を図るようになる。混乱が深まり、トルコやイランの諸勢力も参入する。

そのロシアは国際的批判をものともせず2014年にクリミヤ半島を併合した。長い間軍事力強化に邁進して来た中国も東シナ海、南シナ海の島々の領有権

(2) この間、中国はますますアジア太平洋地域で支配力を強めている。中国は「二帯一路」「中国製造2025」などの壮大な構想力を持ち、それを実行する力を蓄えて来た。その背景には、過去30年ぐらいを通じて蓄えた絶大な経済力があり、その経済力を使って軍事力を顕著に高めて来たことがある。東シナ海、南シナ海で領有権を主張して軍事施設を築いて来たことに対していくつもの東南アジアの国々が異論を唱え領有権を争っている。そのうちフィリピンは常設仲裁裁判

所に中国を提訴した。裁判所の判断は中国の主張に根拠なしとして中国は敗訴したにもかかわらず、国際的司法判断を全く無視して、海洋主権や権益拡大を続けている。経済力と軍事力を使って自己主張と覇権主義的行動を見せていると言わざるを得ない。国際社会の声に耳を貸さない、その姿勢の意図を推し量ると、恐ろしさを感じる。

(3) トランプ政権は中国のこうした姿勢に危機感を持ち種々の対抗策をとるようになったが、中国は一步も引かず従来の政策を強力に推し進めようとしている。このため、米中間の覇権争いの暗雲が世界を覆うようになって来た。最近顕著になっているのは米中間の貿易戦争である。二国間の交渉で関税引き上げの脅しを使いながら貿易赤字削減を図ろうとするトランプ大統領に対し中国は逐一アメリカに報復関税を課して対抗するので、米中貿易戦争のエスカレーションは止まず、サプライチェーンが世界的に構築されている今日、米中間の争いは日本を含む世界の経済に深刻なマイナスの影響を及ぼし始めている。軍事面では、中国はかねてより海洋主権の拡大を目指し、東シナ海から南シナ海にかけて自国

の内海とすべく一方的に「第一列島線」と称する線を沖繩から台湾の東を通してフィリピンの方向に引き、その内側の海洋警備活動を強化している。尖閣諸島付近の海上警備活動強化もその表れである。さらに、小笠原諸島、グアム島を通してインドネシアの方向に「第二列島線」を引いて太平洋の真ん中でアメリカとの軍事的対峙に備える構えを見せている。米中間の貿易戦争や軍事的対峙の背景にはデジタルなどの先端IT技術をめぐる覇権争いがある。先端技術における世界での優位性が中国に脅かされていると感じるアメリカに大きな焦りがある。貿易戦争も軍事的対峙も両大国の国益がかかっており、解決が難しい深刻な事態である。

(4) アジア太平洋地域のもう一つの混迷要素は朝鮮半島だ。北朝鮮の自己認識は、小さな自分の国を世界中の国々が敵視して潰そうとしているというものである。だから、指導者も指導者の主張を信じる国民も自国を守るために命をかけている。小さな国が自分の国を守る唯一の手段は軍事力であると考えて、朝鮮戦争以降数十年にわたり必死に軍事力強化に邁進して来た。「ソウルを一瞬のうちに

火の海」にできるような大量の戦車や大砲を配置し、米軍が駐留する日本に届き太平洋にも達するミサイルを開発し、アメリカの攻撃を抑止するためのミサイルや核兵器の保有を実現して来た。「小さな国」の北朝鮮が、軍事大国アメリカをはじめとする世界を相手に長い間国体を維持して来たのは驚異的であるが、その背景に、何十年にわたる北朝鮮の軍事力構築の結果、いまや韓国やアメリカも莫大な自国への被害なしには迂闊に北朝鮮に軍事力を行使することができない状態が生じている。

米中首脳会談が実現し、南北首脳会談も繰り返されて、北朝鮮との間で核廃棄が交渉されるようになったが、アメリカが明確に北朝鮮の体制保証をし、それを北が信じるようにならない限り、北朝鮮が核を廃棄することはなかるうと思う。何十年と手練手管で世界を相手にして国の体制を維持して来た北朝鮮である。金正恩委員長を相手に「完全な核廃棄」の実行をめぐるトランプ大統領や文在寅大統領の姿勢は心もとない。朝鮮半島の問題解決の見通しは明確ではない。

(5) 以上がアジア太平洋地域の混迷を助長する主要因であるが、将来の安定に

向けて幾分なりとも期待できる肯定的要素も見取れる。まず、急速に発展しつつあるインドがある。国連によると、13億の人口を持つインドは2024年にも中国の人口を凌駕して世界一になるそうだ。インドの人口構成を見ると現在25歳以下が人口の53%を占めている。経済成長率は2000年代には8%前後を示し、最近では7%台を持続している。インドにはITの高い技術を習得した若者が多く、これからのインドの発展を担う大きな力になるだろう。先週インドに出張した。この国のインフラ整備は遅れているが、その事実はこれからの経済成長の「伸びしろ」が大きいことを示している。日本は近くインドで長距離の高速鉄道建設を支援することになっている。さらに、インドは民主主義国家であり、日本をはじめとして価値を共有する西側諸国とも協力しやすい関係にある。

(6) 1967年に発足したアセアン(東南アジア諸国連合)は10か国となり、安定した発展を続けている。アジアは世界の成長センターと言われて来たが、中でもアセアンは最近域内の平均経済成長率を高めて発展している。アセアンは経済や社会の発展のために協力し合い、国

際的な政治問題でも協調を図るようになって来た。今日「アセアン共同体」構築を目指して域内10か国間の協力関係を強化している。2015年にはその一要素である「アセアン経済共同体」が創立され、2020年代に「政治安全保障共同体」と「社会文化共同体」を結成するため準備をしている。日本はアセアン発足当初からODAなどを通じ一貫して支援し、これがその後のアセアンの経済社会の顕著な発展に大きく寄与して来た。欧州連合(EU)よりは緩い共同体であるが、日本は引き続きアセアン共同体構築を支援しており、今後も地域の安定勢力として日本の重要なパートナーである。

(7) このアセアン10か国は、日本、中国、韓国の3か国とも様々な面で協力する努力をして来た。日本も「アセアン+3(日中韓)」の連携に努力して成果もあったが、その後日中間や日韓間の歴史問題などをめぐる確執もあってうまく進捗しないこともあった。しかし、最近では「アセアン+6」の連携への萌芽が見られるようになった。この6か国とは、日中韓の3か国に加えたインド、オーストラリア、ニュージーランドの6か国であ

る。発展するインドや価値観を共有するオーストラリア、ニュージーランドとの連携は、より大きな地域での協力関係を実現するために重要である。最近中国が日本との関係改善に舵を切って来たことも追い風である。「アセアン+6」連携推進の当面のきっかけは、RCEP(東アジア地域包括的経済連携協定)合意に向けた交渉の進展である。アセアンにこれら6か国を加えた全体は世界人口の半分を占め、GDPや貿易額は世界の3割を占める。この巨大な広域圏で貿易や投資などを通じたヒトやモノの動きが自由化されるとその効果は計り知れない。最近の16か国のRCEP閣僚会議で本年中の実質妥結を目指すことが合意されたことも良いニュースだ。

3 日本の役割は何か

このように、アジア太平洋地域には混乱を助長する要素と連携に向けた肯定的要素が混在する。近年、中国の目覚ましい台頭に比して日本の国際社会での存在感は相対的に低下しているとの指摘がある。日本はどうしたら良いか、どんな役割を果たすべきか。

(1) まず、一体化を強める日米同盟を

どう運営すべきかという問題がある。北朝鮮のミサイルや核開発による脅威が増し中国にも軍事力を背景にした高姿勢な動きがある中で、単独では対処ができない日本は日米同盟を強化するしか方法がない。安倍政権は4年前、集団的自衛権行使を容認する政策に転換して日米同盟一体化の動きを強め、米軍と自衛隊の共同訓練の回数も増している。周辺の脅威に対応すべく防衛費予算も増加傾向にある。中国の軍事力強化と海洋活動強化に伴い周辺国の軍事費も上昇している。軍事費は一旦上昇するとそれが継続し周辺国との軍拡競争も助長され、軍需産業の後押しもあって逆転させることは通常極めて難しい。すでにトランプ大統領は、アメリカ製武器購入増大などを要求し日本をはじめ同盟国に軍事費(防衛費)の負担増を求めている。

現状では日本として抑止力強化は必要だが、どこまで、どのような方法でそれを実現するかは慎重に考えるべきだ。トランプ大統領との交渉は大変難しいが、方向としては日米間の役割分担を十分協議して、軍事面での対処はできるだけ米側に依頼し、日本は抑止力向上に資する非軍事的側面で役割を果たす方向を目指す

すべきだ。

(2) 2016年に安倍総理はTICA Dという日本とアフリカ諸国との協力を話し合う会議で「自由で開かれたインド太平洋戦略」という新しい政策を発表した。これは、太平洋からインド洋を通じてアフリカ東海岸に至る広大な地域において国際法に従って自由で開かれた活動が実現されるようにすることを目指すものである。換言すれば、二つの大洋を結ぶ地域において「法の支配」を実現し経済の連結性を強化して発展させることを目指す政策である。その政策の具体的な内容は必ずしも明確にはなっていないが、日本政府は引き続きこの政策の実施を国際社会に呼びかけている。背景には、中国が「一带一路」政策を実施しつつ海洋権益行使の拡大を目指していることが念頭にありと推測されている。太平洋からアフリカにかけて自由に経済活動を展開することは日本にとって死活的に重要であるので、日本はこの政策をより具体化させて中国を含めた多くの国々と提携して推進していくべきである。

(3) これらの政策を推進するには中国との協調と融和の努力が不可欠である。

実際にはとても難しい課題であるが、中国との協調を図ると同時に欧州やアセアン+6などの第三国とも緊密に連携する必要がある。では具体的にどんなことができるかについて、いくつかの例を挙げてみる。中国は「一带一路」政策を進める中で「アジアインフラ投資銀行(AIIB)」を設立したが、アジアやヨーロッパの多くの国がこれに参加した。日本はアメリカとともにAIIBへの参加を見合わせている。日本の「自由で開かれたインド太平洋戦略」と「一带一路」政策は同じ方向を向いた要素を持っているので、日本は姿勢を転換して「一带一路」に関与して中国との連携を探ることができよう。また、最近中国は米中関係が緊張する中で、日本との関係改善を模索する政策に転換しているようだ。日中間で、第三国でのインフラ整備支援やODA供与を協調して行おうとの空気も出て来ているようだ。日本は積極的にこの方向での協調を図るべく中国と協議することが望まれる。他方で、国際法に基づかない中国の行動の抑制を促し、中国の軍事力強化に伴う周辺国との軍拡競争を反転させるべく、欧州諸国やアセアン+6の国々を糾合していくことも重要である。これらはアジア太平洋地域における



カンボジアの子どもたちの目の輝き

「国際善隣」関係を構築することでもあるが、日本がこの方向で主導性を発揮することが望ましい。

(4) 最後に、私は「国際協力費（仮称）」という新しい予算費目の創設を提言したい。これはODA予算の概念を発展的に解消させるものである。巨大な財政赤字を抱える中で新しい予算費目の創設は極めて困難視されるが、私は対外依存度の高い日本の国家戦略として考える

べき重要性を持つと考えて、これまで講演や新聞への投稿（例えば朝日新聞2013年3月22日付朝刊「私の視点」）などでこれを主張して来たが、どこからも注目されていない。この予算の使途は、従来のODA（1997年のピークから半減した日本のODA予算を再び増やしていく必要がある）に加えて文化交流（日本のブランドでもある文化という強力なソフトパワーを活用して親日国や日本の支援国を増やす）、人的交流（青年、メディア、教員などを含め各国との交流を抜本的に拡大して、中国や韓国をはじめとする海外の人々との相互認識を改善し、もって各国との友好関係を強化する、それは防衛費増加の抑制に資する）、技術協力（例えば、環境対策技術で他国を支援）、平和交流（例えば、ヒロシマ、ナガサキに海外の多くの政治家、メディア、知識人を招聘して軍縮への賛同者や国を増やす）などである。その予算規模は増大する防衛予算を抑制しつつGDPの0・5%を目指すものとする。本年度の当初予算での防衛費は5兆円近いものになっているが、十数年にわたって削減され続けたODAの本年度の当初予算は5千5百億円台である。丸い数字で単純化すれば、防衛費を1%削減すればOD

Aは10%近く増額できる。国の安全保障を確保する上で防衛費は重要であるが、文化交流、人的交流、その他も国家間や国民間の反感や憎悪を弱め、対立を回避ないし緩和する効果が期待され、安全保障に寄与するし、予算規模も防衛費よりずっと安価である。

（2018年9月20日・公開アジア研究懇話会）

筆者略歴（おがわ こうたろう）

1943年静岡生まれ。

1968年東京大学法学部卒、外務省入省。フランス、フィリピン、旧ソ連、韓国在勤のほか、外務省国際情報局審議官、国際協力機構（JICA）総務部長、ホノルル総領事、駐カンボジア大使、駐デンマーク大使、イラク復興支援担当大使などを経て2007年に退官。

現在、AFS日本協会理事、三井住友海上顧問、全日本柔道連盟特別顧問、国際民商事法センター理事、アスジャ・インターナショナル日本国理事、鴻臚舎代表理事などを務める。

著書『世界が終の棲み家』（2008年、文芸社刊）。

公開講演会記録

祖父 大平正芳と中国

— 現在、過去、そして未来へ ……

元日本テレビプロデューサー 渡邊満子



大平に抱かれた私

2018年10月の日中首脳会談で両国は「競争から協調」の新たな段階に入った。遡ること46年……今日の日中関係の礎を築いた政治家のひとりであり、私にとって母方の祖父である大平正芳についていま一度考えてみたい。

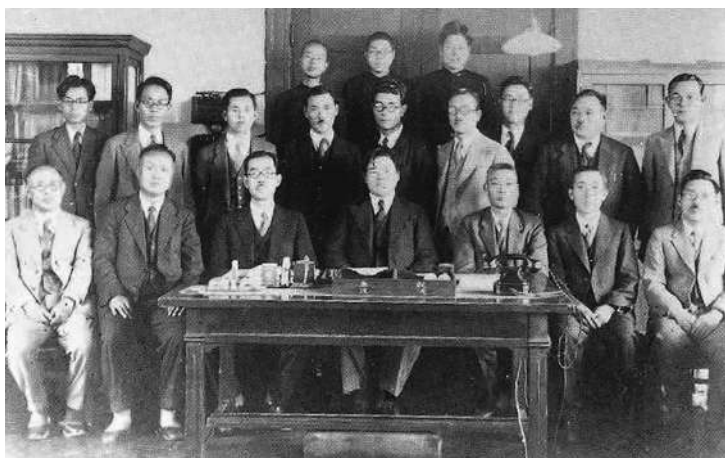
大平正芳は明治末期の1910年、四国香川県の農家に生まれた。この年はハレー彗星が地球に接近し、日韓併合が行われ、大逆事件が起きた。多感な青春時代にキリスト教の信仰の道に入り、伝道師として生きていくと決意したのだが、運命のいたずらで政治家となり、現職の総理大臣として亡くなった。享年70。

祖父がキリスト者として生きていくと決意した時期は、第一次世界大戦と第二次世界大戦にはさまれた激動の時代で、19歳で洗礼をうけたのだが、20歳のときに、日本は昭和恐慌に見舞われた。

翌年には満州事変、23歳のときにヒトラーがドイツの政権を掌握し、日本は国際連盟を脱退。このような重苦しい時代に、東京商科大学に進学した。大学のゼミで大平は、中世の哲学者、聖トマスア

キナスの思想と運命的に出逢った。「人間は他者に助けられ、自らの豊かさを人々と分かち合う存在である。物質の豊かさには限界があるが、心の豊かさは人間にとって共通の目標となりうる……」。

大平は、読書をこよなく愛した。読むということとは、それを書いた人に出会うこと……祖父は読書を通じて古今東西の歴史や哲学を寄せ木細工のように組み合わせて、独自の思想を育んでいたのである。1935年、大平は高等文官試験に合格し、郷里の先輩、津島寿一次官を大蔵省に訪ねて、大蔵省への入省が内定した。そして、入省の4年後の1939年に、興亜院の事務官として張家口に着任し、蒙古、また当時の満州の各地の視



興亜院蒙疆連絡部経済課長時代・張家口にて
(前列中央、昭和15年) (出典『大平正芳回想録 資料編』)

察もした。

この時期に目の当たりにした、日本の軍部の横暴ぶりが、中国国民への贖罪意識につながったのだと思う。また、祖父はこの時期に人間を観る目を養ったようだ。日本人の中でも、軍に取り入ってその権限を利用することばかり考える人間と、本当に内蒙の将来を、日本の未来に視点を据えている人間がいることが見え

てきたのだ。

この中国大陸の経験により、中国は大陸国家であり、日本は海洋国家である……と、考えるようになった。また、日本人と中国人は、共通点より相違点の方が多く、何かにたとえるとすると、大晦日と元旦のようなものではないか……と、後に語っていた。つまり、隣り合っていないが、まったく違うという意味だと思っただからこそ、仲よくしていくためには、努力が必要だという考え方だ。

敗戦直前の大平の言葉が残っている。親しい友人に語った言葉である。「日本が戦争に負けることは残念だが、今の日本のように軍部独走でもし勝ったとしたら恐ろしい世の中になるだろう、そしてそのような日本は早い時期に倒れる日が来るのではないか……」。

祖父は終戦の前後の大蔵大臣をつとめた、津島寿一大臣の秘書官だったので、津島さんを通じて状況を把握していたのだと思う。仕事の鬼、怖い人として、大蔵省の関係者のうちで伝説となっている津島寿一が、終戦後のある日大臣室でひとりハラハラと涙をこぼし、泣かれていたそうだ。秘書官の大平が「大臣、どうなさったのですか」というと、津島さんは「実は明日から国民に対する食糧の備



飛行機の中での写真 (周恩来と3人)

蓄も尽きたんだよ……」と……。

自分を大蔵省に採用してくれた、同郷の恩人が悲歎にくれる姿にふれて、大平はどんなにか心を動かされたのだろうか。戦争という「悪」、戦争体験こそが、政治家、大平正芳の原点だと私は考える。

政治家となった大平が、ずっと考え続けていたこと、それが、中国との国交正常化だった。1972年7月、田中内閣が成立。いよいよそのときがやってきた。しかしながら、田中総理は必ずしも積極的ではなかった。何故なら、党内外の猛反発に加え、各方面からの脅しも多々あったからだ。もしこれに失敗をしたら、退陣……たったの2か月で退陣とは……。

「絶対に成功させてみせる！ 俺にまかせろ……」。大平は田中総理の背中を押した。毎日のように、他の外務省幹部は抜きで橋本課長と協議を重ね、夜は料亭で、古井喜実さんとの打ち合せを行った。そしていよいよ9月25日に北京へ出発。厳しい交渉を経て、なんとか調印にこぎつけた。

9月30日、上海から帰国。帰りの飛行機の中で、大平はつぶやいた。「今は両国ともお祭りさわざだが、30年後、中国が経済成長を成し遂げたときには、新たな問題が起こるだろう……」と……そして



李克強さんとの写真

て、その予言は、的中したのだ。

本年五月、李克強首相の来日に伴い、日中平和友好条約締結時に尽力した方々とその家族が招かれ、お目にかからせていただく機会を得た。

この日、私は祖母、大平志げ子の生前大切にしていたきものを着て出かけた。この写真で私の隣（前列右から3人目）

におられる方が、現在、中国人民対外友好協会会長をされている李小林女史だ。李女史は、1953年、湖南省生まれで、故李先念元国家主席の娘で、習近平国家主席の幼馴染みだという。アメリカ留学のご経験もあり、英語が堪能なので、中国語の苦手な私も親しくお話ができた。「私が今回の訪問団のスポンサーなのよ！」と語ってくれたのだが、日本人女性にはなかなか見つけられない、凛として、さわやかな自信に満ちあふれた女性だった。

昨年の夏、『文藝春秋』誌にある中国人女性について書かせていただく機会があった。それは李徳全という、戦後、中国国内に抑留されていた日本人戦犯名簿を、戦後初の訪中団の団長としてもたらした女性についての記事だった。以下、そのときに書いたものを引用したい。

終戦から72年秘話開封！

BC級戦犯を帰国させた中国の女傑
戦犯名簿を日本にもたらした李徳全の足跡を辿る

一九五四年十月三十日夕刻、終戦後国交がなく「竹のカーテン」に覆われていた中華人民共和国から、日本への初の使者が羽田空港に降り立った。黒いオーバー



コートに、焦げ茶色の中国服を身に纏った李徳全(58)である。彼女がタラップの上に姿を現すと、「ワァーッ」という歓声が巻き起こった。打ち振る小旗が一斉にざわめき、フラッシュの光の束と共に、自然と拍手が起こった。

中国共産党赤十字訪日代表団の団長を務めていた李女史は、当時周恩来政権の衛生部長、日本では厚生労働大臣にあたる役職を務めていた。中国紅十字会(日本という赤十字社)の会長でもある。副団長の廖承志氏は、日本生まれの日本育ちで、日本語はペラペラ。毛沢東から「半分は日本人だから」と言われたほどの知日家だ。

総勢十名の代表団は十四日間の日程で、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の六都市を訪問した。彼らの最大の目的は、中国国内に抑留されていた、所謂B

C級戦犯の名簿を日本側に渡すこと。そして、彼らの帰還を促すことであった。当時の日本は台湾と国交を持っており、中国を国として承認していなかった。そのため現地に残された居留民の引き揚げには中国共産党の許可が必要であった。

徐々に一般人に関しては引き揚げが進められていたが、収監されていたB・C級戦犯については、生死も分からない状況が続いていたのだ。そのため、李女史の代表団は、戦犯の留守家族を始めとする関係者から期待を持って受け入れられた。

羽田空港は出迎えた日本人で立錐の余地なく、空港の外にも三千人あまりが集まっていたというから、当時の人々の歓迎ぶりがよくわかる。だが、いまの日本で李女史のことを覚えている人がどれだけいるだろうか。実は中国でも、李女史がキリスト教徒であるなどの理由で、その存在は近年まで省みられていなかったのだ。

私が李女史のことを知ったのは偶然だった。

私は以前、日本テレビで番組制作に携わっていたが、いつか日中戦争に翻弄された人々の姿を取り上げたいと思っていた。それは私の母方の祖父・大平正芳の影響が大きい。

大平は一九七二年九月、外相として田中角栄首相とともに中国を訪問、日中国交正常化を実現させた。中国側の相手は奇しくも李女史が来日したときの総理と同じ、周恩来であった。

日中国交回復は、大平が政治家になった当初からの悲願であった。大平は大蔵官僚だった一九三九年、中国の張家口に一年半ほど単身赴任していた。その際に日本の軍部の横暴な振る舞いを目にし、また阿片売買の予算管理という職務に就いていたことで、中国の人々への贖罪意識を芽生えさせたという。

幼いころから中国という存在を身近に感じていた私は二〇〇八年、北京オリンピックの年に『私たちの中国』と題した特別番組を企画した。李香蘭や川島芳子など、日中の歴史で翻弄された女性たちを描いた作品だ。そして、その制作の過程で知り合った研究者の方に、李女史の存在を教えてもらったのである。戦後間もない激動の中国において、政治の中枢で活躍した女性がいた。その事実に着き付けられ、取材を進めるうちに、彼女に関わった日本人にめぐりあうことができた。

本稿では、李女史の活動と接点のあった人々の視点から、彼女が日本に何をも

たらしたかを、浮き彫りにしたい。

待ちわびていた戦犯家族

「李徳全という名前は、我が家にとっ
て忘れることのできないお名前です」

こう語るのは桑田富美子（80）。一九
二八年、奉天近郊の線路上で起きた張作
霖の爆殺事件の首謀者とされる河本大作
元陸軍大佐の孫である。

事件後、河本は南満州鉄道の理事や満
州炭鉱の理事長を経て、国策会社山西産
業株式会社の社長に就任。戦後、山西産
業は中華民国政府に接収されるが、引き
続き河本は同社の最高顧問として経営を
任されていた。しかし一九四九年、中国
共産党軍の捕虜となり、太原収容所に収
監されたのだった。

それゆえ河本の家族は、李女史の訪日
を待ちわびていた。

到着当日、李女史率いる代表団は、羽
田を出ると宿舎の帝国ホテルへ。ホテル
前では約二千人もの中国人男女が「歓迎
祖国紅十字会代表」と記された大きな旗
を振り、熱狂的な歓声をあげていた。

すぐに廖副団長が会見を行ない、「戦
犯のうち非常に大部分のものが寛大な処
置を受ける」（戦犯への連絡は）日赤か
ら中共紅十字を通じて戦犯に届くように

する。小包などの差し入れも結構だ」と
明言。歓迎夕食会の席上で李女史は次の
ように述べた。

「赤十字の人道主義的精神と平和を守
る運動は全く一致している。私は平和を
守り戦争反対に努力している日本人民に
感謝する。日本人の帰国と戦犯問題につ
いては中国紅十字会としてできるだけの
世話と援助をしたい」

小柄でふくやかな李徳全女史は、終始
微笑みを浮かべ、歓迎に応えた。

戦犯の家族たちの期待は、否応無しに
高まっていた。

翌日、代表団は芝公園にある日本赤十
字社を訪れた。李女史は車から降りると、
待ち構えていた島津忠承日本赤十字社長
と固い握手を交わす。そして「わざわざ
お招きありがとうございます」と挨拶し、戦犯名簿
を手渡した。

名簿は二冊に分かれており、「日本侵
華戦争罪犯名冊」には生存者千六十八名
の、「同死亡者名冊」には死亡者四十名
の名前、部隊名、階級、年齢、出身地な
どが詳細に記載されていた。またその後
の懇談で、戦犯の大部分と帰国を希望す
る一般人二千人は年内もしくは来春まで
に帰国させることが発表された。

日本赤十字の講堂には約七百人もの留

守家族が詰め掛けた。引き渡された名簿
は次々と講堂に送られ、係員が読み上げ
ていく。集まった家族たちは肉親の名前
がないかと耳をそばだて、名前を読み上
げられた家族がいると全員が拍手をして
喜びをともにしていた。李女史も姿を見
せた。元満州国総務長官武部六蔵の孫・
河本春子を抱きかかえて頬ずりをし、熱
狂的な拍手が送られるシーンもあったと
いう。

だが喜びに沸く家族が多かった一方、
死亡と発表され、悲しみに暮れた家族も
いた。その四十名のうちの一人が河本元
大佐であった。桑田が言う。

「来日前の紅十字会からの情報では、
祖父は収容所で無事で生きているとのこ
とでした。そこで母たち姉妹は、『どう
か無事に日本に帰して欲しい……』とい
う主旨の手紙を李徳全さん宛に出してい
たのです」

一九四八年までは「元気である」との
便りがあり、その後もかつての同僚が北
京にいて、ときどき差し入れをしてくれ
ていたのだという。

「だから代表団の来日で、祖父が日本
に帰ってくる日ははっきりするものだ
と楽しみにしていたので、あの日、前年の
八月二十五日に亡くなっていたことを知っ

て、家族みんなでもとてものがっかりしたことを覚えています」

死因は「心臓衰弱」。詳細は不明。名簿一つで肉親が亡くなったことを知る家族の心中はいかばかりだっただろうか。ただ翌年の暮れ、急に遺骨が日本に届いた。

「いきなり役所から舞鶴に遺骨が届いているから取りに来てくださいと連絡があったのです。特例的なことなので手紙を読んだ李徳全さんの計らいだという人もいました。いずれにせよ家族としてはありがたかった」

桑田の思い出の中の河本元大佐は「優しいおじいちゃん」だったという。

「祖父は仕事が多忙でたまにしか会えなかったのですが、長身に白い麻のスーツを着て、庭の広い芝生で私たちと遊んでくれました。『事件』のことを知ったのは引き揚げた後です。祖父の別の顔を見た気がしました。何があんな行動に駆り立てたのか。『勝つことが国のため』と教え込んできた教育が問題なのではないかと考えるようになりました」

桑田はいま児童文学研究家として、平和を題材にした絵本の翻訳、展覧会に関わっている。

“流転の王妃”との縁

李女史の来日に際し、政権末期にあった吉田茂首相は、まるで接触をさけるかのように訪米日程を組み込んでいた。長い間、外交活動に従事してきた吉田茂のバランス感覚からすると、中国とはなるべく交流を少なくすることこそが、日本の早期の主権回復につながると考えていたのだろう。

代わって代表团と面会したのは、三笠宮崇仁殿下や高松宮妃喜久子さまらである。十一月三日、旧高松宮邸・光輪閣で日本赤十字のお茶会が催され、代表团と面会した。その際には、「三笠宮と高松宮妃は日本軍が中国で起こした戦争について後悔とお詫びの念を伝え、日中両国の友好促進に尽力するよう希望した」という（『李徳全―日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性』程麻・林振江著）。

三笠宮・高松宮とともに日本赤十字の名譽副総裁であり、海外在留日本人や捕虜の帰国などの慈善事業を、熱心に行っていた。

満州国の「ラストエンペラー」愛新覚羅溥儀とその弟、溥傑も当時、消息が分からなくなっていたうちの二人であった。溥儀や溥傑ら満州帝国宮中一行は、日

本への亡命途中に、ソ連軍の捕虜となる。ソ連極東部のチタとハバロフスクの強制収容所に収監され、溥儀は極東国際軍事裁判にもソ連の証人として出廷させられた。

そして、一九五〇年、中国に身柄を移送される。満州国の戦犯として、撫順の政治犯収容所に弟の溥傑らとともに収監されてしまった。一時、ハルピンの政治犯収容所に移動するも、一九五四年には再び撫順の政治犯収容所に戻っていた。かつて絢爛豪華な紫禁城で暮らした皇帝とその弟の収容所での生活は厳しいものだった。

二人がどこにいるのか、日本に帰国していた家族は引き揚げ者の情報からしか得る術はなかった。

後に「流転の王妃」と呼ばれた溥傑の妻・浩は、一年四カ月後に渡り中国大陸を転々とした末一九四七年に帰国。一度だけ一九五一年にソ連の赤十字社から夫の手紙が届くが、その後は再び音信不通に。浩は二人の娘を育てながら、ひたすら夫の無事を祈り続けていた。

そして一九五四年九月、李女史らの代表团が来日する直前、日本赤十字社経由で溥傑から手紙が届いた。消印には「中国 撫順」と記されていた。次女の福永

嬌生（77）が語る。「いまは撫順にいらること、元気で変わりないから心配するなという父からの手紙でした。驚いたのが、手紙が書けるようになったのは私の姉の慧生のおかげだと書かれていたことです。『慧生の手紙を周首相がお読みになり、私に届けてくださった。とても立派な中国文だと、首相も感心しておられたと聞いている』と。姉は家族の誰にも相談せず、周恩来首相に手紙を出し、それが首相の目に止まり、赤十字社を通じて父と私たち家族との文通が許されたのです」

なぜいきなり周恩来が文通を認めたのか。もちろん手紙に書かれていた通り、慧生の手紙に心を打たれたということもあるかもしれない。だが李女史ら中国紅十字会の代表団が、この時期に訪日したことも関係あるだろう。実際に浩は、来日した李女史に会いに行っている。

「母が宿舎をお訪ねして父のことを聞いたようです。手紙でやりとりはしていても、父がどのような生活を送っているのか、こちらではよくわからなかったものですから。とても優しい方で、丁寧にご対応してくださったようです」

この後、溥傑と浩ら家族との間で交わされた手紙の中にも、たびたび李女史の名前が見受けられる。「手紙写真と食料

等、李徳全女史にたのんで下さいましたから、やがてお手元へ行く事と思います」（一九五六年十月十日、浩から溥傑への手紙）、「李徳全女史も近々来日されます」（一九五七年八月二十四日、浩から溥傑への手紙）。

一九五七年の二度目の来日の際にも浩は李女史を訪ねている。

六年間、およそ二百通に及ぶ文通の末、模範囚として釈放された溥傑と家族は一九六一年、再会を果たすことになる。

〈中略〉

李女史は、モンゴル族の貧しい家庭に生まれた。父親は力仕事で家族を養い、李女史も早くから家族の世話を任されていた。父がキリスト教を信仰するようになった影響で、彼女も三歳の時に洗礼を受けた。最愛の姉と妹を相次いで病気で亡くするという出来事も経験した。教会が運営する学校に通い、卒業後も教会の教育事業活動を行った。結婚相手も「クリスチャン・ジェネラル」と呼ばれた軍人・馮玉祥であった。抗日戦争期には、孫文夫人の宋慶齡と共に、戦地の児童を受け入れる施設もつくった。

これらの活動が認められ、一九四九年に「新中国」が誕生した際に衛生部長に任ぜられ、中国紅十字会の会長も務める



王効賢さんの写真 中国留学生を瀬田の自邸に招いて記念の植樹（昭和59年11月11日）（出典『大平志げ子夫人を偲ぶ』）

ことになったのだ。そして引き揚げ者の日本への送還に尽力し、代表団の団長にも選ばれた。

〈中略〉

ただ冒頭でも触れたとおり、キリスト教徒で、来日当時の彼女は共産黨員ではなかった（後に入党）。そのため、これだけのことを成し遂げたにもかかわらず、中国国内でその功績が広く知られることは殆どなかったのだ。

〈中略〉

李女史は晩年まで紅十字会の会長として精力的に活動し、日中国交正常化の前、一九七二年四月に亡くなった「享年72」。現在は、北京八宝山にある革命烈士の廟に祀られている。

『文藝春秋』2017年9月号より

戦争の世紀を生き抜いた女性、大きな志と実行力を持った女性、李徳全の存在を私たち日本人は忘れてはいけないと思う。

国交正常化の直前に天に召された李徳全女史……初来日当時、学生だったにもかかわらず通訳に抜擢されて来日した王効賢女史は、まるで李女史の遺志を継ぐかのように、1972年の国交正常化交渉でも通訳を務め、その後は中日友好協会の重鎮として活躍した。祖母の大平志げ子、母、森田芳子と共に私も親しくお付き合いをさせていただいた。

このたび、拙著『祖父 大平正芳』（中央公論社刊）が、中国語版として、社会科学文献出版社より出版され、久しぶりに北京を訪問した。中国社会科学学院の関係者、学者さん等に祖父についての講演をさせていただいた。この中国版の

前書きに私は次のように記した。

この本は、政治家とその政治家を支える家族の「愛と哀しみ」を、孫娘である私が「女性の視点」で描いた本です。

私が初めて出会った中国人女性、国交正常化の時に両国首脳の通訳をされた王効賢さんです。王女史の初来日は1954年、戦後初の訪日団の団長をつとめた李徳全女史の通訳としての訪問でした。その後、1972年9月の国交正常化交渉にも通訳として活躍され、その後も中日友好に尽力され、大平家の私共も大変お世話になりました。私はこの本を尊敬する王効賢先生に捧げます。

女性の社会進出がいち早く成し遂げられた中国には、お手本にしたい女性が数多く活躍されています。2013年に開催した『日中未来の子ども100人の写真展』に際しては、程永華大使夫人の汪婉女史が「日中の子ども達が、幼い頃から出会える幸せ」について、美しい日本語でスピーチをしていただき、一同感動の涙を流しました。このような女性同士の絆は、これからも両国の平和と友好の礎となることでしょう。

『外祖父 大平正芳』社会科学文献出版社刊より

現在、私は日中映画祭実行委員会というNPOの副理事長として、映画による文化交流をしている。この団体は、中国に日本映画を日本に中国映画を紹介する団体で、両国の関係が冷え込んだときにも欠かさず交流を続けてきた。大平は、民間による分厚い交流こそが大切だと常々語っていた。私は、これからも日中の映画をはじめとする文化交流を軸として、戦争の世紀を生きた日中の女性たちについての研究も続けていきたいと考えている。

（2018年10月18日・公開アジア研究懇話会）

筆者略歴（わたなべ みつこ）

1962年東京生まれ。

慶應義塾大学文学部仏文科卒業後、日本テレビ放送網株式会社入社、『キューピー3分クッキング』のディレクター、プロデューサーを20年余り担当。

公開講演会記録

日本の伝統話芸 講談の世界

講談師 宝井琴柑



国際善隣協会様にて、平成三十年九月二十七日講演いたしました内容を、補足をしつつ、ここにまとめたいと思います。

一、まずは講談の概要を申し上げます。

●講談の歴史、演目数など。

五百年の歴史をもつ、日本の大衆話芸。張り扇（はりおうぎ）で釈台を叩き、パパンという音を響かせて調子良く語ります。講談をする人のことを、講談師、または講釈師と言います。

●嘘を、面白おかしく語ります。

「講釈師 見てきたような 嘘をつき」「講釈師 扇で嘘を 叩き出し」歴史に残る物語や有名な語りますが、もとの話をアレンジして、面白くしていきます。嘘とわからず本当の出来事のように聞こえるのも、話芸の妙。

●話の幅は広い。

平安時代、戦国時代、江戸時代、明治時代などの日本の出来事から、外国の歴史、最近のニュースや小説まで、なんでも講談になります。講談の演目の総数は、約五千。

昔から語られてきた演目は「古典」、最近作られた演目は「新作」と、分類されます。

講談師が自分で台本を書くことも多く、脚本家と語り手を兼ねます。

●伝統の世界。

師匠に入門すると前座修行をし、二つ目、真打と昇進します。現在、宝井、一龍斎、神田、田辺、桃川、旭堂という流派があります。講談師は全国に約八十人います。



師匠の宝井琴星と琴柑

師弟関係は、実の親子を越えるほど、深いもの。単純に芸を教わるだけでなく、講談師としての生き方を、師匠という存在の背中を見て学びます。

師匠は無償で芸を教えるかわりに、弟子は師匠に尽くします。

二、皆様にも、講談ミニ体験と称して、声を出していただきました。

「善隣」読者の皆様も、また参加された方も復習がてらに、音読してみてください。

間にパンパパンッと机を叩きながら、声を出しましょう。実際に声を出して調子をとれば、気分爽快。すっきりします。

「半鐘」

半鐘は、ジャーン。ジャーン。

ジャーンは火事が遠くにある時。

ジャンジャンジャンジャン…は近くにある時。

ジャージャーは、避難する時。

ジャジャジャジャーンは、ベートーベン。

三遊亭円朝原作「牡丹灯籠」

(おつゆ)「しんざぶろうさま、しんざぶろうさま」

(しんざぶろう)「あつ、お前はおつゆ、どうして入ってきた」

(おつゆ)「しんざぶろうさま、私をうらざりましたね。」

お恨みに存じます。しんざぶろうさま、あなたが憎い、

でもやっぱり恋しい、しんざぶろうさま」

(しんざぶろう)「ゆるしてくれ、助けてくれ、寄るな、わあ〜」

三、入門したきっかけについて。

講談師になったきっかけを聞きたいと、委員の方に、あらかじめリクエストをいただいております。まずは、講演ではお話しなかった幼少の頃。

自分でまとめました講談台本がありますので、載せておきます。

講談調に仕立てていますので、こちらもよかったら、音読してみてください。

時は昭和の終わり、ロッセアイス雪見だいふくが発売され、千葉は船橋にららぽーとが開業した頃。

神奈川は横浜で産声を上げましたのが、講談師宝井琴柑でございます。

未熟児として生まれつき、赤ん坊に似合わず骨と皮ばかりに痩せこけ、貧相で、

「まるで鳥がらのようだ」「怪獣の子どもに見えるわ」と親は顔を見合わせましたが、はえば立て、立てばあゆめの親心、なんとかかんとか成長いたしまして、小学校に入学いたしました。

運動はからっきしだめ。ぜんそくもちの虚弱児童。背の順ではいつも一番前。

「遅いなあ。なにとろとろしてんの」。外で遊ぶにも、足が遅い。すばしっこい友達たちにおいていかれてしまう。

ぼんやりとした、おとなしい子どもでしたが、ところが、ある日のこと。

国語の時間。「はい、次の人」と先生に指されますと、席から立ち上がって、教科書を読みあげる。

「おれはあれからずっと考えていたが、どうもそりゃ、人間じゃない、神様だ。

神様が、おまえがたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんぎつねは、「へえ、こいつはつまらないな。おれが、くりや松たけを持つていつてやるのに、そのおれにはお礼を

言わないで、神様にお礼を言うんじゃない、おれは引き合わないなあ」と思いました。

と、『ごんぎつね』の一節を読みあげますと、わっと拍手がきた。

「はい、上手に読めましたね」と先生にもほめられる。目だたない子どもでしたが、この時ばかりは輝いたのです。

こうして、声に出して読むことの面白さに気がつきました少女は、いよいよ、講談教室へ通うこととなる。果ては講師になろうと決意をするわけでございますが、それはまたの機会に申し上げることとしたしまして、梅檀は双葉より芳し、蛇は寸にして人を呑む、と自分で言ったりや世話はございませぬ……。

「琴柑講師への第一歩」の一席。

というわけで、今読んでいただきました台本は、「三分講談」と称し、講談教室や講談創作教室で創作の手本として配布しているものです。

教室では「自己紹介や、日常の身の回りのできごと、あるいは世間のニュースなどを、三分の講談に仕立ててみましょう」という課題を出しています。古典ばかりでなく、身近な話題も講談に仕立てられる、そのことをレクチャーし、楽し

んでいたいています。

と、ここまでは、講演では触れなかった私の子ども時代のエピソードでした。

成長した後に、大学を出て、出版社に入社。書籍の営業マンをした際に、「営業トークも話芸だ」と思い立ち、どうせ話芸をやるならば、と、中高生時代にアマチュアとして習った講談の道へと転向したので。

わずかな期間ですが、一般社会で勤める経験をしたことは、良かったと思っています。どんな業種も、どんな職種も、それぞれに大変なことがある。楽な仕事はない、と身をもって知ったことで、特殊と言われがちな現在の仕事でも辛抱ができます。

一般社会で手堅く働くことを続けられなかった自分なのだから、講談の世界が最後の砦。腹をくくって生涯の仕事にしようと思えるようになりました。

四、講談界の現在、琴柑の現況など。

独演会「きんかんよみ」を、二つ目に昇進して以来、主に上野広小路亭やお江戸日本橋亭にて続けています。独演会は自身で主催しているため、企画から、金



バイオリンデュオ ミオストリングスと講談の競演

銭面や集客も、大変に骨の折れるものですが、自身にはっぱをかけて、続けていきます。

お客様に楽しんでいただけますよう、ゲストは寄席の範疇を越えて、多彩な方々をお招きしています。

前項でも、創作講談について触れました。

今、いただいているお仕事は、お仕事の三分の一ほどは、創作してほしい、あるいは持ちネタの新作講談を披露してほしい、といった依頼です。

琴柑の持ちネタの一端をご紹介します。まず、琴柑書き下ろしオリジナル作品、師匠琴星の作、文学作品など原作のあるもの、と成り立ちは異なりますが、大きな区分で「新作」と呼ばれている演目です。

「満洲引揚げの密使 丸山邦雄」(国際善隣協会様にご依頼いただき、制作、発表したもの)。

「エルトゥールル号の遭難 山田寅次郎の足跡」

「世界のホンダ 本田宗一郎伝」

「アルミニウム産業の夜明け」

「山本周五郎糸車」

「横浜のヘボン博士」

「ベートーベン」

「あんぱんを食べた次郎長」

「倭建命」

「伝説のボクサー白井義男伝 三部作」 など。

他に、なれそめ講談、企業講談、お身内の方の半生、なども請け負って制作・ご披露しています。

また、私が力を入れている仕事の一つに、子どもにも講談という文化を伝える、

講談を教える、というものがあります。学校訪問や、おやこ講談教室を積極的に開催しています。

今年二月には『おやこで楽しむ講談入門』(彩流社)も刊行し、三月の出版記念講談会には、国際善隣協会様の会員の方もお運びくださり、またこのたびの九月の講演会にても販売させていただきました。



おやこ講談教室、荒川区では毎月開催

小学校中学校にての講談教室の開催は、入門時、故六代目宝井馬琴(琴柑の大師匠)の郷里、静岡県内での活動について回ったのを初めとし、現在まで、全国各地で開催しています。学校訪問では、主に小学校高学年を対象とすることが多く、低学年に講談は難しいと考えていました。一方で、体験会で講談に夢中になった子どもたちが、継続して学べる場がないことを残念に思っていました。どこかに拠点が作れないものか、長年の想いがありました。

その想いを、ほうぼうで口に出していたところ、ようやく近年、糸口ができたのです。友人の紹介で子育てサークルにて、幼稚園児から小学校一年生を対象にした体験会を開催。

これまでは小学生でも高学年を中心に教えていましたので、こんなに小さな子たちがどうかしら、と不安でした。未知の分野だったのです。ところが、やってみてびっくり。子どもたちが、とても良い反応を見せてくれ、初回の体験会は大盛り上がり。講談が、新鮮なパワーを発揮し、親子に響いたのです。

体験会後も、教室として毎月レッスンを継続することになり、一年半が経ちました。

まだ字もあまり読めない三歳・四歳・五歳児が、耳で覚えた講談の文句を語り、張り扇を打つ姿には、父母はもちろん、見学に来た祖父母も感激しきり。

この成功例で、私も自信がつき、ノウハウも着実に蓄積しています。おかげさまで、低年齢を対象にした「おやこ講談教室」の拠点が、少しずつあちこちにでき始めています。

今のところ、子どもの分野ではあまり収益は出ませんが、講談という文化を絶やさないため、未来の講談のため。

この子たちがきつと将来、お客様、あるいは講師師になってくれる！と期待を込めて、活動しています。

「こういうことをやりたい！」と口に出していれば、実現できるものであることを実感しました。これまで講談とは縁の薄かった子育て世代が、講談の魅力を理解してくれたのも、嬉しいことです。

また、子どもたちの純粋に講談を楽しむ様には、毎回、新鮮な発見があります。創作を教えてもいないのに、詩のようなオリジナル台本を作ってきた一年生もありました。

それから、講談の仲間との会で芸を磨くことも、ありがたい環境です。



「女流講談会なでしこくらぶ」毎月開催

講釈場、定打ち（じょううち）小屋、などと呼ばれる、講談専門の寄席が一軒もなくなくなってしまった現在、修行の場は自分たちで作らなければなりません。

講談協会が毎月主催している「講談定席」の他、「なでしこくらぶ」、「連続講談勉強会」、「新鋭講談会」などに、私は出演しています。先輩、後輩、と肩を並べて、切磋琢磨しています。

九月の講演では、締めくくりに「那須与一 扇の的」をお聴きいただき、質疑応答をしてお開きとなりました。

「どのようにして声を鍛えるのか」など、皆様より多くのご質問を賜りました。おかげさまで、来年の秋に真打昇進し、五代目宝井琴鶴を襲名することが決まっています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（2018年9月27日・公開フォーラム）

筆者略歴（たからい きんかん）

神奈川県横浜市出身。山形大学人文学部卒業。講談協会所属。本籍は埼玉県飯能市。10月21日生まれ。てんびん座B型。中学生の頃より、宝井講談修羅場塾にて講談に親しむ。平成18年4月、宝井琴星に入門し、6月に前座となる。平成22年6月、二つ目に昇進。東京都内の各寄席や、各地の地域寄席に出演のほか、講演や講談教室の講師もつとめている。平成30年2月『おやこで楽しむ講談入門』（彩流社）を上梓。平成31年10月、真打昇進予定。

「宝鋼」第一期工事

完成式典の思い出

中和物産KK特別顧問・元新日鉄経営企画部長代理 杉本 孝（会員）



今年（1978年）は日中平和友好条約締結後、40周年にあたる。同条約は1978年8月に締結され、10月には当時副総理であった鄧小平が来日し、批准書の交換がなされた。その際、鄧小平は新日鉄の君津製鉄所を訪問し、当時の新日鉄会長稲山嘉寛に「これと同じものが欲しい」と述べたのである。

上海宝山製鉄所（宝鋼）の建設構想は、実はその前年から持ち上がっていた。当初は上海地区の鉄不足解消のための高炉単独建設構想だったが、日本側からの助言もあり、



鄧小平、新日鉄君津製鉄所を訪問（右側は稲山氏）

月のうちに鉄鋼一貫製鉄所の建設を目指すことになった。

中国技術進出口会社と新日鉄との間で「宝山製鉄所の建設に関する議定書」が締結されたのは、1978年4月のことだった。これは、プロジェクト全体の基本方針と全体枠組みを示した「宝山プロジェクトの憲法」と呼ばれる基本文書であり、そこには1980年中に第一高炉の火入れを目指すことが明記されていた。しかしその後の諸事情により、第一高炉が火入れされたのは1985年の9月15日となり、第一期工事の完成式典が挙行されたのは、転炉、鋳型

製造、分塊、シームレス鋼管等

の諸工場が順次立ち上がり、安定操業が確保された11月下旬となったのである。日中平和友好条約締結40周年にあたり、この完成式典について記録にとどめておくのは、決して無意味なことではないだろう。

宝鋼第一期工事完成祝賀式典に出席する日本側代表団が上海に到着したのは、11月25日の午後であった。代表団総勢191名を乗せた特別機が14時50分に虹橋空港に舞い降り、エプロンに近づくと、10台の紅旗が機側にずらりと横づけされた。タラップから降りた首脳陣は中国側の案内によりそれぞれ指定された

黒塗りの紅旗に分乗し、その他の団員が数台のバスに乗り込み終わると、車列は上海中心街にある錦江飯店へ向けて一斉に滑り出した。

当時の虹橋空港は現在とは全く異なっており、かなり老朽化した低層の建物が数棟あるだけだった。空港と上海市街地を結ぶ道路も今日のように整備されてはおらず、交通は車輦のみならず、自転車や荷車で常に混雑しており、タクシーでも錦江飯店まで通常1時間以上はかかっていた。ところがその日、我々を乗せた車列はわずか20分で錦江飯店に到着したのである。

「開道車」と呼ばれる警察車輛がけたたましくサイレンを鳴らしながら、さほど広くもない道を気でも狂ったかのような勢いで疾走した。これに先導された紅旗の車列が流れるようにつき従い、それらに遅れまいとする数台のバスが喘ぐようにあとを追った。道路の両側には小銃を腕にした兵士が数メートルおきに立ち並んでいた。彼らは我々

の車列に背を向けて立ち、歩道を行きかう市民や自転車が車道に決して立ち入らぬよう目を光らせていた。彼らの肩越しに銃口を右上に向けた小銃が見え、その向こうには、一体何事が起きたのかと足を止め、猛スピードで通り過ぎる車列を見やる鈴なりの市民の好奇に満ちた熱い視線があった。対向車の通行はほとんど遮断されており、信号は見通せる限り遥かかなたまですべて青に切りかえられていた。交差点にさしかかった車列はわずかに速度を緩めながらも決して停まることはなく、左右の道路からの大量の車輦や自転車が警察官たちにより交差点への進入を確実に阻止されていることが確認できると、再び元の猛スピードに加速したのである。

上海での祝賀式典出席者の名簿を持ち、式典スケジュール等の説明のために私が本社ビル20階の秘書部に上がったのは、2週間前のことだった。秘書部長への説明の前に、儀典官のよう

な部長代理の了解を得ねばならない。上海での祝賀行事を滞りなく行つたためには、出席者全員の同一行動が不可欠であること、そのためには特別機をチャーターする必要があることを説明し、団長以下の団員名簿を彼に示した。名簿第1位は稲山嘉寛新日鉄名誉会長（団長、経団連会長）、第2位は田沢智治通産政務次官、第3位は斉藤英四郎新日鉄会長（副団長、経団連副会長・同次期会長）、第4位は中江要介外務省在中国特命全權大使、第5位は武田豊新日鉄社長（経団連次期副会長）（肩書はいずれも当時、以下同）、ここまで説明した時、部長代理が声をあげた。「こんなこと、できるわけがない！」と言うのである。今まで新日鉄の名誉会長と会長を同じフライトに乗せたことはない、まして社長も含めて3人が同じ飛行機に乗るなどということが許されるわけがない、万一墜ちたらどうするの

だ、と言うのである。危機管理上の正論である。

しかしこのフライトに乗るのは新日鉄の首脳陣だけではなく、当時の日本経済界の主要メンバーが数多く含まれていた。三菱重工会長（経団連次期副会長）、日立製作所会長（経団連副会長）、三菱商事社長、三井物産社長、日本輸出入銀行副総裁、日本興業銀行会長（経団連外交問題委



起工式（1978年12月23日）、稲山氏（中央）、谷牧氏（国務院副総理・右側）

員会委員長）、日立造船会長、三菱電機会長など、例をあげればきりが無い。彼らも当然のことながら、直属部下の経営層を同行させていた。もし新日鉄が危機管理上の理由で三首脳に別々のフライトを手配すれば、他社もこれにならうのは不可避である。そうなれば代表団の統一行動はきわめて困難となり、ミッションを受け入れる中国側に多大な負担がかかる。団長会社がそのようなことはすべきでないとの最終判断が下され、今回だけは運を天に任せる例外扱いとなったのである。

祝賀式典は翌26日の15時から、宝山製鉄所製鋼工場内の1号転炉注入棟で挙行された。祝賀会場に近づく、あちこちに満艦飾の旗が飾られ、赤旗が風にたなびき、銅鑼や太鼓を打ち鳴らす音が聞こえ、祝賀ムード一色に染まっていた。会場に集まったのは中国側から閣僚級30名を含む約2000名の関係者と、日本側から現地派遣指導員10

0名を含む約300名、そのほかにシームレス鋼管工場の建設を担当した西独と、鉄鉱石を供給したオーストラリア及びブラジルから若干名の代表が出席した。転炉注入棟にしつらえられた舞台上には中国側指導者とともに、各国からの来賓代表が席を連ねた。式典の様子を翌日の『人民日報』は次のように伝えている。最初に祝辞を述べたのは、当時の國務院総理趙紫陽であった。続いて同じく上海市長江沢民が、党中央及び國務院より連名で送られた祝電を読み

上げている。これに続き、中曽根康弘首相と安倍晋太郎外相から寄せられた祝電を、在中国日本国特命全權大使中江要介が代読している。まさに、日中両国を挙げての国家プロジェクトであったと言えるだろう。趙紫陽総理は祝辞の中で以下のように述べている。宝鋼第一期工事の完成は、宝鋼の全職員労働者と外

国専門家との一致協力及び刻苦奮闘の結晶であり、「対外開放政策を実行し、国外の先進技術を導入したことによる豊かな成果であり、更には、我国社会主義建設がまたしても勝ち取った偉大な成就でもあります。（中略）ここに私は、党中央と國務



起工式における谷牧氏のテープカット

院を代表し、宝鋼建設の第一線で奮闘されたすべての管理者、技術者、労働者の皆さんに、熱烈なるお祝いと、心よりのねぎらいの意を表します。宝鋼建設において、我々と友好合作していただいた、日本及びドイツ連邦などの各国の経営者と技術専門家に対し、また、宝鋼の建設に関心を寄せて下さったすべての友人に対し、衷心より感謝の意を表します。」

これらをうけて、日本側団長稲山嘉寛は以下のように述べた。「本式典にお招きいただきました私ども日本側関係者は、宝鋼完成を目の当たりにして、このような大事業をお手伝いさせていただいた喜びを新たにいたしますとともに、今まさに人生における最も誇らしいひと時を過ぎつつある感激に耐えない次第であります。千数百年に及ぶ日中両国交流の歴史を振り返ります時、この宝鋼建設はかつてない規模と内容を誇る画期的な記念碑と申しても過言ではありません。（中略）もとより本日



高炉火入れ式典（1985年9月15日）

私どもの協力の絆は一段と強化されたのであります」。

の佳き日に至るまでには、幾多の困難がありました。しかし、重要なことは、それらの苦難を日中双方の友好と努力により一つ一つ克服して、本日ともに悦びを分かち合える日を迎えることができたということであり、ます。困難が大きければ大きいほど、それらを解決した皆様方と

2位以下との間に巨大な懸隔がある。つまり中国は世界の粗鋼生産量の約半分を一国で生産していることになり、恐らくこのような状況は有史以来初のことであろう。安価で良質な汎用鋼材が中国で生産できるようになり、その結果中国において鋼材多消費産業の競争力が強まり、

それら諸産業の生産拠点が世界中から中国へジャリジャリと引きずり寄せられていったのである。現在鋼材価格は低迷し、中国の過剰生産に対する恨み節が世界中の鉄鋼メーカーから聞こえてくる。しかし価格と品質の総合評価に基づき、市場競争を通じて中国の鋼材が顧客により選択されている以上、恨み節を述べても何も始まらない。そんな暇があれば自社製品が顧客からもっと選択されるように、より高品質な高級鋼材のより選択されやすい価格での提供を目指し、日夜技術開発に邁進するべきなのである。

ここで「ある国の粗鋼世界シェア÷その国のGDP世界シェア＝鉄鋼産業特化度」（以下「特化度」と略す）と定義すれば、中国の特化度は3・28である。同様に計算すれば、日本の特化度は1・01、米国の特化度は0・20となる。特化度が1であれば、その国は経済規模に見合った鉄鋼産業を擁していることになる。つまり今の中国は鉄鋼産業と鋼材多消費産業に大きく依存した経済構造にあり、日本はGDP規模に見合った鉄鋼産業を有しており、米国はすでに鉄への依存を弱め、より高度な産業にシフトしていることが分かる。世界が必要とする鋼材の量は需要産業の需要量によって決まり、それを個々の顧客が自国にとって着価格（生産費＋輸送費）が最も安い国から購入しているに過ぎない。特化度には貿易を通じて、国家間の比較優位構造が反映されているのである。

この比較優位構造は時とともに変化しており、日本の特化度が一番高かったのはデータを溯れる範囲で最も昔である1970年の2・52であった。つまり、この48年間で日本は脱鉄鋼産業化が進んだのである。汎用鋼材はもはや中国に太刀打ちできなくなっており、より高品質の鋼材に特化していかなざるを得ない。しかしこれを裏から見れば、中国が良質で安価な汎用鋼材を供給してくれているお陰で、日本はより高級な鋼材に特化し、よ

り高度な経済構造へシフトしていくことが可能となるのである。

数百年のスパンで見れば、覇権国は常に隆替をくり返しており、「盛者必衰の理」が貫徹している。先発国が開発した技術も、長い目でみれば必ず後発国の追いつけと改善に曝され、いずれは凌駕される運命にある。先発国に可能なことは、既存技術にさらなる改善を積み重ね、凌駕されるまでの時間をいかに先へ延ばすかということだけである。特許に期限が定められているのは、一定期間経過後、技術は人類共有の財産として公開されることが人類のさらなる進歩に資すると思われるからである。

成熟技術の他者への積極的移転により背水の陣を敷き、自らをより高度な技術革新に駆り立てない者は、企業も国も転落を免れ得ないのである。

宝山製鉄所建設への協力を中国側から求められた時、社内上層部では大議論があったという。

虎の子の技術を出すなんてんでもない、宝山に技術を出せば他の製鉄所にもタダで伝わってしまう、ブーメラン効果が起きたらどうするのだ、等等。それらの懸念には根拠があり、事実それらは後に現実となった。そうした懸念にもかかわらず建設協力へ社論を統一し得たのは、稲山氏の中国への強い思いがあったからである。中国にはできないだけのことをせねばなら

ない、貧しいままの中国よりも豊かな中国の方が結局は日本のためになる、こうした大局観が社内に浸透していった。そして、「宝山にわが社の10番目の製鉄所を建設するのだ」という稲山氏の言葉が、社内合言葉となったのである。「中国にはできないだけのことをせねばならない」という稲山氏の思いは、当時の政財界首脳に共有されていた。戦争中の日本の加害事実に痛んだ彼らの心は、中国

の賠償請求放棄により一層立つ瀬を失い、自身の権限範囲で可能なすべてのことをなさなければ、自らの尊厳を取り戻せないと思えていたように思える。だからこそ、経済界の総力をあげた宝鋼建設協力が実現し、政界でも大平内閣による対中円借款が初めて実現し、その流れが中曽根内閣以降へと受けつがれたのである。



第一期工事完成式典（1985年11月26日）

宝山製鉄所は現在では武漢製鉄所と合併し、中国宝武鋼鉄集団として粗鋼生産量世界第2位を誇る中国最強の鉄鋼メーカーとして隆盛を極めていく。日中平和友好条約締結40周年にあたり、自国にはね返る不利益を小事とし、中国の国家基盤建設のために総力を結集した日本からの熱い支援が注がれた歴史を、日中両国のできるだけ多くの国民に知って欲しいと、心から願っている。

筆者略歴（すぎもと たかし）

1947年山口県生まれ。1974年東京大学法学部卒業。新日本製鉄㈱入社。1995年同社退社。2001年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。新潟産業大学、大阪市立大学教授を経て、2008年京都大学経営管理大学院客員教授。2015年より現職。

編著書『東アジア市場統合の探索——日中韓の真の和解に向けて』



編・訳 上松玲子

パンダ予算は有用か

パンダの保護のために1990年から2010年の間に3万平方キロの国土に67の自然保護区が建設されたほか、毎年2億2千8百から2億9千2百米ドルもの国費がパンダ予算として支出されていることに、疑問の声も少なくない。

先頃、中国科学院動物研究所魏輔文氏とそのグループがパンダの経済効果について国が投資している額の10倍の見返りがあるという研究結果を公表した。

まず、生態系に対する貢献。67の自然保護区の生物多様性は温帯地域で最も高く、他の絶滅危惧種の生息域でもある。パンダ資金は他生物の保護にも役に立っているのである。

2つ目は、文化的価値である。この数年『カンフーパンダ』のようなパンダを題材にした映像作品も多く制作されている。

最後に、庶民の収入増加だ。2000年から2010年、保護区のある四川省、陝西省、甘粛省の農民の収入は平均で56%伸びているが、保護区に隣接する地域の農民の収入は64%伸びているというデータがある。

『羊城晚報』2018年9月3日

虚偽の告発に警鐘

先頃、最高人民法院と最高人民検察院は『虚偽の訴訟を刑事

案件として処理する際に適用する法律に関する若干の問題の解説』を発売した。この中では、虚偽の証拠や証言をねつ造して、民事告訴を行った者は刑法で定められた虚偽訴訟罪に問われる

と規定されている。ただし、犯罪と認定されるのは、全くの無から有を生み出した場合である。実際、こうした事例は存在し、人々の正常な生活や経済活動を阻害していると、最高裁の責任者。例えば、不動産の購入制限政策や税金逃れのために、債務不履行をでっちあげることがある。またある講師が、私怨をはらすため、論文を学長の名前で発表した後、盗用されたとして訴えたケースもある。

こうした行為は法律の公正性を損ない、司法機関の人材、経費、時間の浪費を招く。何より無実の者に苦痛を与える。『解説』発布の狙いは虚偽訴訟の違法性を明確にし、法律の隙間について得意になっている者たちに警鐘を鳴らすことだ。

『法制晚報』2018年9月27日

クーポンの投機的売買

9月21日陽澄湖の上海蟹漁が解禁になり、上海蟹引換券の販売も始まった。上海蟹が養殖業者から市場に生きた状態として

出荷される頃、消費者の手にある「紙の上海蟹」の価格は何倍、十倍にもなり、数百元から数千円になる。価格が吊り上がれば、転売業者にとってはよい商機となる。だが、今年は買取り意欲が落ちているようだ。

引換券は、本来販売数の予測と、計画的な供給という目的に、ギフト用という用途が加わり広まった。だが実際は投機的な動きなどが横行してきた。

同様のものが月餅券だ。こんな笑い話がある。月餅メーカーは額面100元の月餅券を刷り、65円で小売店に売る。小売店は80円で消費者に売る。消費者はギフトとして他の人に贈る。贈られた人は40円でダフ屋を生業にする「黄牛」に売る。黄牛からメーカーが50円で買い取ると、月餅を生産せずともメーカーは儲かるというもの。蟹引換券にも通じる話だ。

券を買う者は蟹を食べず、蟹を食べたい消費者の声は届かない。空売りが横行し、実際に券を蟹に替えようとしても、蟹は

なく、引き渡しは年を越える。品質管理もおざりになる。

腐敗撲滅の圧力が高まる中、ギフト需要が減少し、蟹券市場は縮小傾向にあるが、本来の機能と秩序の回復には、業界団体や正規の生産者の自助努力と、価格操作や品質詐称に対する厳しい取締りが肝要だろう。

『工人日報』2018年9月26日

各地で農学部設立の理由

8月31日中山大学は農学研究院の設立を宣言した。この9か月の間に全国で6つの大学に農学研究院が設立されている。

これには、現代農業が転換期にあることと、政府の農業重視という政策が背景としてあるだけではないらしい。中国科学院大学現代農学院の楊維才常務副院長によれば、中央政府の重要政策である「双一流建設」（国際的な一流大学、一流学科の建設）の中で各大学が資金と人材を獲得するために目玉となる学科の建設に躍起になっているのだ。

国家教育部の定める学科分類では農学部には作物学、園藝学、農業資源と環境、植物保護、畜産学、獣医学、林業学、水産学、草学の9学科が含まれる。総合大学の多くでは、農業と関連のある研究分野が生物学部に取り込まれている。それを独立させて農学の分類に再編したほうが、予算獲得の上で競争倍率が軽減されるというのである。

北京師範大学高等教育研究所の李奇教授は、各地の農学院の設立は農業の発展に大いに役立つと歓迎する一方で、乱立することには懸念を示す。既に各省市には農業大学が存在している中で、総合大学にも農学院が必要なのかどうか、各地方政府は社会のニーズに合わせて真剣に論議、計画されるべきであろう。

『中国新聞週刊』第36号2018年9月27日

消えた中国のハリウッド

霍爾果斯（コルガス）は新疆ウイグル自治区の西北端の小都市。川の向こうはカザフスタンだ。多くの人が映画の配給会社

の名前として記憶にあるだろう。この数年法人税減免の優遇政策により、多くの企業を誘致したが、そのうち実体のあるものはわずか2%で、広告、映画、投資、IT関連会社など、現地に営業実体がない会社が98%だ。

だが、今年の1月に優遇政策が見直された。営業所の面積や従業員数、従業員の社会保険料納入額、減免された税金の20%を現地に投資するなど、現地に実体があることを示す指標が条件に追加された。

これを受けて、法人登記取り消しラッシュが起き、6月以来102社もの映画会社が相次いでコルガスから撤退、さらに6月に発覚した二重契約問題を機に、国の税制が見直された。

映画産業研究家の蔣氏は、政府には、文化産業の特殊性を考慮し、他国同様減税や奨励政策による映画産業の支援を望むと述べている。

『北京日報』2018年10月8日

土産物ばいも同じ

木の櫛、シヨール、帽子、腕輪などはこの景勝地でも売られている土産物だ。似たり寄ったりの安物が、道端で売られているというのが旅行の土産物のイメージになりつつある。

原因は様々だ。我が国の観光業は相変わらず主な収入源を「入場料」に頼るという経営モデルをとっている。そのため業界自体に旅行記念品の市場を開発しようという動機に欠けている。先進国では観光客の物品購入が観光収入の6割から7割を占めているが、わが国では4割にも満たない。それは魅力的な商品がないからなのである。

加えて、意匠デザイン登録保護の意識も薄いため、安易に他の真似をしてしまうのだ。どうせコピーされてしまうなら、時間やコストをかけて独自の土産物開発に苦労しようという者も減る。こうして全国どこに行っても同じようなものが置かれる現象が起きるのだ。

『中国青年報』2018年10月9日

コラム

《腰折れ文》 十六、

渡邊澄子（会員）

前号よりはるかに大ニュース続出。まず沖縄知事選挙。翁長知事が文字通り命を賭した辺野古反対の後継者と、政府トップが大挙して応援した移設を進める候補者との一騎打ちだった。政府側候補の選挙は、フェイク演説やネットでの中傷、投票への動員など目に余る投票の自由の侵害に当たる恥ずかしい汚いものだったらしい。この選挙は日本の在り方に関わる重大事なのに、NHKも民放も無視の態度をとり、当選後も新知事の横顔さえ伝えなかったのは「一強」への思惑か。情けなさ過ぎて涙も出ない。欧米識者ら133人が辺野古反対声明を出し、NYでも「辺野古NO」のデモが行われた選挙結果は「米、大差に『驚き』」と米国でも報道されたほどの大勝利だった。翁長知事の妻樹子さんの寄与も大だったが県民は

「誇り」を選択した。だが、政府は民意を無視して「辺野古が唯一」一辺倒。

うんざりだが内閣改造で第四次安倍政権誕生。顔ぶれを「身内」「論功」「在庫処分」と新聞は報じたが、斎藤美奈子の「茶番劇」、「見飽きたメンバーと見たくない新閣僚の加わっただけの誰も責任をとらない厚顔無恥内閣、希望が見えない曇天内閣」は当を得たネーミング。長期政権はレームダック（死に体）に陥るとも。「女性活躍推進」が看板なのに、女性閣僚は首相の「可愛い子ちゃん」で問題の多い一人だけ。文書改竄問題ほか何かと物議を醸す麻生氏留任に非難轟々。世論もこの内閣の評価3割に対してわずか45・2割で、麻生氏留任反対は51・9割だったと報道。私は敢えて無知蒙昧あるいは無知文盲内閣と位置

づけたい。それが証拠に文科相が、文科相がですよ、就任記者会見で教育勅語は道徳教育に有効と評価の発言をしたのだ。「君一忠」が根幹の教育勅語は、帝国憲法や明治民法とともに差別を固定化し、植民地支配、人権抑圧の元凶であり、戦争に帰結して多くの人々を犠牲にしたのだ。「明治」を礼賛してはならない。安倍首相の妻昭恵氏が森友学園で児童の教育勅語朗唱に感動したとの発言は記憶に新しい。安倍首相はじめ閣僚15人が拠る日本会議は明治回帰を悲願とする組織だ。この組織の拡大現象は、『新潮45』休刊問題に発展し、論議の延々と続く現況を招来させている。「生産性」発言の差別議員を擁護する政府の姿勢が右翼を力づけている。

嬉しいニュースもあった。がん治療に新時代を拓いた本庶さんのノーベル医学生理学受賞賞に、思わず翁長さんの死を阻止してほしかったと思ってしまった。さらにノーベル平和賞が#MeToo運動の世界的うねりを背景に性暴力の根絶への強い意志から、性暴力

被害者の治療が続いている医師ムクウェゲさんと性奴隷として陵辱を受けて被害者代表として闘っている二十五歳の女性ムラドさんの受賞である。この世界の流れに反して日本は選択制夫婦別姓導入賛成派が反対派の29・3割を大きく上回って42・5割になったのに、法務省は、首相が反対の反対派が多かった前年度の数字を発表し続けている。

福島原発事故の犠牲者救済は終わっていない。原発の怖さが実証されたのに政府は原発政策を変えようとせず、供給力が需要を上回り電力が余る事態で九電が原発の発電を優先して太陽光発電を停止させたという。何たることだろう。

侵略政策本格化の前触れと言える大逆事件で、市民の尊敬の的だった大石誠之助が冤罪で刑死して百年。名誉市民として顕彰され、新宮市で開催の「大逆事件サミット」に三泊四日で参加した。強行採決された実質共謀罪の廃棄を叫びたい。

陶々俳壇

兼題：「豊の秋」「職」 席題：「色鳥」

天高し天職教師の半世紀 戸部まもる
秋深し辞書引く夜の多くなり //

薄紅葉女三人旅の寿司 上野京
職人の手に松茸の香りけり //

☆○亡き友の声なき声や星月夜 岡和水
○台風に研がれし空の青さかな（由紀子） //

☆○塩焼きの魚でよろし豊の秋 橋本紅杓
那須連峰金色に暮れ豊の秋（京） //

職人の絵付け流麗紅葉かな 柳原仁哉
○枝豆や休む暇なく手の動き //

○ずつしりと労苦の実り稲穂垂る 佐藤若杉
悲喜こもごも九十三歳の誕生日 //

☆○晩節のうから集ふや豊の秋 大内善一
○つややかな椽の実降れり虚空より //

一本を揺らす椋鳥らの武者震ひ（和水） 馬場由紀子
犬と猫仲良く眠る豊の秋（仁哉） //

☆最高点 ○由紀子選 （一）各特選

選後評

馬場由紀子

悲喜こもごも九十三歳の誕生日 若杉

一般的に、誕生日の句に「悲喜こもごも」の措辞は安易に思えるかもしれない。しかし、九十三歳というまた違ってくる。卒寿を詠む俳句は最近では珍しくないが、それからの一年は宝玉の如く、美しく尊い。

睦まじや夫婦職人松手入 善一

庭師の夫が松を形良く手入れして、落とされた葉を庭師の妻が掃き集めて、次第に庭の冬支度が整っていく。上五で「睦まじや」と詠んだのは、作者が庭よりも職人夫婦に惹かれていたということだろう。

満月や山を背にして五重塔 和水

作者の実体験である。九十歳、寺を巡る旅の最中のことだろう。八十代の終わりに胃腸に見舞われるものの、強靱な体力と精神力で克服された後のこと。作者を迎えてくれたのは神秘的な月の明るさであった。

村中に太鼓どよめく豊の秋 紅杓

豊作を神に感謝する秋祭。作者は旅の途中で祭に遭遇したのかも知れない。旅行雑誌には出ないようなマイナーな村祭りだが、それだけに地方色豊かな趣を感じることができる。

豊の秋玉の曾孫を授かれり 仁哉

秋の佳き日に曾孫が誕生した。手放して喜んでいる作者が目に見えてくる。『豊の秋』の季語には、豊が無事に生まれたことへの感謝と、これからすくすくと育ってほしいという作者の願いが込められているのだろう。

秋晴や黄金溢るる千枚田 まもる

千葉の棚田であつたか。ひよよと青い穂が風に靡く季節も、黄金に垂る季節も、棚田は美しい日本を私達に思い出させてくれる。勿論、見て楽しむばかりではなく、食する楽しみもあるのだ。

台風一過竹ばうきが見当たらず 京

今年の台風の威力は尋常ならざるものであった。その爪痕は未だに癒えていない。作者のお宅では幸いなことに、竹箒が見当たらない程度で済んだようだ。庭掃除をしなくてはいけないのに……

四季折々(二)

戸部 守

本年5月号に掲載した「四季折々」の続編として前回同様四つの設問をします。

問一「みはつへにおのれはしたにつきにけりすでにやむのみなかほとにつく」という戯れ歌があります。どのようなことを詠んだ歌ですか。

問二 早稲田大学の応援歌に「覇者覇者早稲田」とあり、慶應義塾大学の応援歌は「慶應慶應陸の王者慶應」とあります。応援歌としてはどちらが適当ですか。

問三「あくび」という部首を含む漢字はどれですか。

①解 ②珍 ③欣 ④駅 ⑤穢

問四「近江」という地名は琵琶湖に由来します。では「遠江」という地名の基になったのは何という湖ですか。

解答

問一 巳・己・巳の読み方を詠んでいます。

問二 王者は仁徳を基とする政道を行う者、覇者は武力権謀をもって国を治める者という意です。競技を応援する際にはどちらが適当でしょう。

問三 ③です。「欠伸」(あくび)を思い起こします。

問四「浜名湖」です。「遠江」(とのおとつみ)は「遠い淡(あは)海」の意です。

カホ会通信

◆平成30年度関西地区懇談会開催

10月16日グランヴィア大阪において関西地区懇談会を開催した。周辺会員を含めて5名の方が出席され、1年ぶりの交流会となった。元理事長で最高顧問の石原健一氏(95歳)は会場へは来られなかったが、前日の表敬訪問では元氣にご対応いただいた。「私から満洲を取ったら、何も残らない!」という言葉が印象的だった。関西地区懇談会では、今年度方針や協会の近況を中心に報告を行い、今後の方向性について意見交換を行った。出席者の平均年齢が78歳で満洲にゆかりのある人が多く、孤児問題については他人ごとではないとの言葉が複数あり、善隣協会には、できる限り孤児の側に寄り添ってほしいとの意見が多かった。

◆自衛消防訓練の実施

毎年11月9日(15日は、「秋の全国火災予防運動」の期間ですが、当協会も11月27日に善隣会館のテナントさんを含めて消防訓練を実施します。この日はあらかじめ芝消防署には連絡をしておき、午後3時に火災報知器をならし、協会員、テナントさんも階段を使って1階まで下りてもらいます。次に裏の路地で消火器を使用して実地訓練を行います。この1年間で新たに入居されたテナントさんもおられるので、今後継続して取り組んでいきます。(事務局長 藤沼弘一)

同好会だより

へ一石会
10月囲碁例会優勝 岡 和良氏
〈謡曲会〉
12月18日例会 実施予定曲目

曲目	役	割	地頭
竹生鳥	シテ澤村	ワキ土屋	宮下
敦盛	シテ鶴川	ワキ神保	村瀬
天鼓	シテ宮下	ワキ神保	鶴川

みんなの写真館

イタリア・ミラノ

大聖堂と月(表紙)

ドゥオーモ広場の大聖堂の上に月が出ていた。横には大きなクリスマスツリーも点灯している。2017年12月30日、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晚餐』をサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会、ドメニコ会修道院で見たあと、ドゥオーモ広場に戻ってきたときのものだ。念願の『最後の晚餐』を見た興奮が冷めやらなかったが、これまた、何度見ても大聖堂(ドゥオーモ)のあまりの美しさと荘厳さに、しばし息をのみ、見とれ、月さえも大聖堂の飾りのようだった。(原田克子)

還暦を迎える東京タワーの上から(表4下)

東京タワーは1958年の開業以来、東京のシンボルランドタワーとして、本年2018年12月に60年の節目を迎える(還暦)。2013年電波塔としての役割を東京スカイツリーに譲った。写真は2018年9月にタワー展望台から増上寺・レインボーブリッジ・東京湾を撮った。

(村田嘉明)

雲岡石窟(表4上)

柏市と友好都市の中国・河北省の承德市をこの9月に訪ねました。その帰途、隣接する山西省・大同市の世界遺産

2018年12月の行事予定

- 5日(水) 13:00 俳句会
兼題「古暦、算」及び当季雑詠
- 6日(木) 14:00 ○公開フォーラム
「ハワイ2世と太平洋戦争」
松元裕之氏(映画監督)
- 11日(火) 14:00 謡曲会(松木先生稽古日)
- 13日(木) 14:00 ○公開フォーラム
「武蔵国高麗郡の建郡と渡来人ー古代の日朝関係について」
岩下壽之氏(元都立高校教員、中国での日本語教師)
- 17日(月) 18:30 ◎公開アジア研究懇話会
「朝鮮半島和解のダイナミズムと沖縄からの平和発信」
木村朗氏(鹿児島大学教授)
- 18日(火) 13:00 謡曲会例会
- 25日(火) 14:00 謡曲会(松木先生稽古日)
- 26日(水) 14:00 公開「善隣古海塾」
「戦争の時代、そして満州国を振り返る」第4回
塾長:古海建一氏(前当会会長、当会顧問)
- 27日(木) 16:00 公開「善隣中国塾」
テキスト:『中国の夢ー電腦社会主義の可能性』第4回
塾長:矢吹晋氏(横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問)

※12月28日午後から1月4日まで、事務局はお休みします。

12月の会議予定

<u>4日(火)</u> 14:00	環境委員会	11日(火) 14:00	国際交流委員会
6日(木) 16:00	講演委員会	20日(木) 14:00	理事会(第10回)
6日(木) 16:00	広報委員会	26日(水) 14:00	東北委員会

※会員外一般聴講者の参加費は、◎印:1000円、○印:500円、無印:無料です。

※下線は通常日程に変更あり

みんなの 写真館



INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<http://www.kokusaizenrin.com>

ISSN 0386-0345
二〇一八年(平成三十年)十二月一日・毎月一日発行

「善隣」第四九八号(通巻七六五)

発行所 〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五(番代表)